

# 子どもの言葉を育てる保育と そのための環境作り

## 親を巻き込む保育実践

増田修治 MASUDA Shuji

- I —— 子どもの言葉を育てる保育
- II —— 親とつながるための・壁新聞・園だより・学級通信
- III —— ほらあな空間による「密接な関係作り」と「関係性の变化」
- IV —— 全体を通してのまとめ

【要旨】子どもの言葉を聴き取る保育実践のあり方は、とても重要なものとなっている。そのあり方と具体的な働きかけを取り上げ、子どもの言葉を育てるための方策とは何かを提起する。また、子どもの言葉を育てていくためには、親の協力が不可欠である。その親の協力をえるためにも、学級通信などで、園や学級の様子を伝えていく必要がある。そのことによって、親たちが様々な協力をしてくれるようになっていく。その様子や重要性及びその効果を論じてみたい。

また、ほらあな空間によって、子どもの密接な人間関係を創り出していくことも大事なことである。その空間がどのように子どもの関係性を育て、子どもの言語を育てるのかについても問題提起したい。

そして、論文全体を通して、子どもたちに「自己肯定感」を育てる保育のあり方を考えるものとしていきたい。

### I —— 子どもの言葉を育てる保育

#### 1. 命令言語に囲まれている子どもたち

小学校4年生129人に、自由記述で「お父さん・お母さんの口ぐせ調査」を実施したところ、なんと64個もの口ぐせが出てきた。その中で多かったものベスト10をあげてみたい。

- ①明日の用意したの？ (105)
- ②早く寝なさい。(95)
- ③早くしなさい。(87)
- ④早くお風呂に入りなさい。(85)
- ⑤どうして弟(妹)とケンカばかりするの？ (82)
- ⑥こんなにちらかして、かたづけなさい。(81)
- ⑦早く終わらせなさい。(76)

⑧外で遊びなさい。(76)

⑨早く宿題をやりなさい。(75)

⑩気をつけなさいよ。(75)

第1位の「明日の用意したの？」については、81%もの子どもが言われているのである。その他にも、「ドンドン音を立てるな！」「早く起きなさい」「さっさと勉強しなさい」「うるさい！」「足をもんで」などが続いていた。驚いた言葉としては「足！ 手！」「なにものなの？」「言うことを聞かないと犬小屋に寝かすわよ」などといった言葉であった。「なにものなの？」などについては、思わず「自分の子どもでしょ！」と言いたくなってしまった。

これら64個のうち、私のクラスで最高62個言われているという子どもがいた。朝起きてから学校行くまで、帰ってから寝るまで、「～しなさい」という言葉に囲まれているのである。まさに命令言語漬けと言って良いのではないだろうか。

今の子どもたちは、ここにあげたように「命令言語」に囲まれている。子どもを育てるのは「感情言語」である。「痛かったの？」「大丈夫？」と言った言葉が、どれほど子どもの心を安定させることだろうか。こうした言語状況の中で、「自分で考える子ども」にするのは難しいと言える。また、「自己肯定感」が育つ環境にあるとはとてもとても言えないのではないだろうか。

## 2. 子どもの言葉を発達させる言葉がけとは？

### (1) 子ども同士の豊かな会話を広げるための保育士のあり方

次の記録は、2歳児の「口頭詩」である。

#### おとなの焼肉（2歳児女子）

散歩の帰り道に定食屋のそばを通った時  
「おとなの焼肉のにおいがするね」

この時、保育士は「そうだね。お腹が減ったね」と言ったのである。すると、子どもたちは「そうだね。お腹がすいたね。早く園に帰ってお昼を食べよう！」と言って、走って帰ったのである。もしこの時、保育士が、「おとなの焼き肉のにおいって、どんなにおい？」と聞いたら、どうだったであろうか？ きっと「おとなの焼き肉のにおいじゃないよ！」とか「焼き肉のにおいって、もっと違うにおいだよ！」「家の焼き肉のにおいの方がいいな」などと、いろいろ出てきたのではないだろうか。

そう考えると、子どもの言葉を聴き取ると同時に、どのような働きかけをすることが、子どもの言語を育てていくことになるのであろうか。一番大事なことは、そうした子どもの会話を広げていき、他の子どもに問いかけていくことである。そうすることで、子ども同士がつながり、豊かな会話がかかわるようなクラス集団が育っていくのである。

## (2) 豊かな成長を引き出す「仕掛け」をする

そのクラス集団が育っていくためには、やはり「仕掛け」というか「働きかけ」がとても重要である。次の例は、そうした働きかけが子どもの豊かな会話を広げた例である。

### きょうりゅう発見

ゆうき (男・4歳9カ月)

(きょうりゅう発見! に大騒ぎの4人。4人は、「きょうりゅうにワナをかける」となわとびにフープを結びつけ、それをしかけています。その中の一人がゆうき。)

前にうちにきょうりゅうが来た時は、お湯かけたよ。

みんな〈へえー〉

保育士 きょうりゅう、なんて言ってた?〉

「濡れたー!」って言った。

みんな〈ワッハッハーと笑う。〉

前にうちにきょうりゅうが来た時は、牛乳かけたよ。

みんな〈へえー〉

保育士 きょうりゅう、なんて言ってた?〉

「冷たーい!」って言ってた。

みんな〈ワッハッハーと笑う。〉

ゆうきは、「自分の言った事でみんなが楽しそうに笑っている」という経験を、ここではじめてすることができたそうである。ここからは、子どもたちの中に流れる心地よい一体感が見てとれる。保育士が、「言葉を曳き出すことを意識して聞いてみた」中で、こうしたつながる会話が広がったのである。

しかし、よく見てみると、保育士は「きょうりゅう、なんて言ってた?」としか言っていないのである。子どもの会話には必ず波がある。ワ〜と盛り上がったあとに、当然トーンが下がっていく。その落ちかけたところで保育士が言葉を入れていくことで、会話は次の山へとつながっていくのである。子どもの言葉は、勝手に育っていくわけではない。やはり、保育士の働きかけが重要なのである。

## 3. 「におい」の学習と老人ホーム訪問から見てきたもの

### (1) 抽象的なものを具体物を通して語らせる

研究会で、「子どもたちのつぶやき」という園通信が提案された。5歳児の子どもたちに♪お母さんっていいにおい♪の歌を歌った後に、「どんなにおいなのかを聞いてみた」という報告であった。お父さんとお母さんを比べていてとても興味深い内容だった。子どもたちが、どのようなにおいを感じ取っているかを紹介したい。

お 母 さ ん	お 父 さ ん
<ul style="list-style-type: none"> <li>・ いいにおい</li> <li>・ お化粧のにおい</li> <li>・ 香水のにおい</li> <li>・ お風呂のにおい</li> <li>・ タバコのにおい</li> <li>・ トイレから出たらくさい</li> <li>・ 妹のにおい</li> <li>・ さわやかないいにおい</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ ビールのにおい</li> <li>・ さわやか（ミント）</li> <li>・ くつ下がくさい</li> <li>・ タバコのにおい</li> <li>・ 仕事のあと、くつ下がくさい</li> <li>・ 髪の毛がいいにおい</li> <li>・ 酔っぱらいのにおい</li> <li>・ 洋服が汗くさい</li> </ul>

どちらかというと、お母さんはいいニオイで、お父さんはくさいニオイだと考えているようである。正直「♪お父さんっていいニオイ♪」という歌があってもいいのにと感じてしまう。

この「いいニオイ」というのは、どちらかというと抽象的な概念の中にとどまっていると言って良い。ここで「お母さんのいいニオイがするものって、どんなものだろう？」と聞いてみたらどうだっただろうか。きっと「お母さんの枕」とか「お母さんのマフラー」などといった、具体物が出てきたのではないだろうか。こうした具体物を想起させることで、「いいにおい」という言葉と「お母さんの枕」という具体物がつながっていく。そうした時に、抽象的な言葉に具体物がつながり、言葉が内実を伴ったものとして子どもの中に定着していくのである。

たくさん言葉を知っていることは大切だが、それ以上に大切なのは、「内実や実感のこもった言葉」をどれだけ獲得していくかではないだろうか。

## （２）保育園とは、人間に対する豊かな学びを保障する場所

保育園の５歳児の子どもたちが老人ホーム訪問に行った時に、「みんなとどこが違っていったか？」を聞いたところ、次のようなことが出てきた。

- |   |
|---|
| <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 手がかさかさ</li> <li>・ 白髪</li> <li>・ 歯がピカピカ</li> <li>・ 声が低い</li> <li>・ 顔がぼろぼろでかわいそう</li> <li>・ 足がわるい</li> <li>・ めがねをかけていた</li> <li>・ 歯がずれていた</li> <li>・ 歯が抜けていた</li> <li>・ 目が違った</li> </ul> |
|---|

私は、これを読んでいるうちに気持ちが暗くなってしまった。「もし私が老人ホームに入って、保育園の子どもが訪問したら、保育園の子どもたちからこんな目で見られるのか」と思ったからである。

もしここで、「みんなとどこが同じだった？」と聞いたらどうだったであろうか。「ぼくたちと同じように、お友だちと一緒に楽しそうに歌をうたっていたよ」とか「楽しそうに将棋をさしていたよ。お友達と一緒にいるのって、ぼくたちと一緒に楽しいんだね」とい

った言葉が出てきたのではないだろうか。保育士の言葉がけで、子どもがどのような人間観を持つかが決まるといっても過言ではない。だからこそ、保育士の言葉がけを十分吟味していく必要があるのではないだろうか。

#### 4. 子どもはみんな「不思議の国のアリスの住人」

ある時、こんなおもしろい口頭詩が紹介された。

M男	「先生の家、どこにあるの？」
保育士	「電車に乗って行くとあるんだよ」
M男	「どーやって行くの？」
保育士	「あのね、電車に乗って行って、降りたら前の道をまっすぐ行って、右に曲がって信号渡って、左の坂道を登っていった所だよ」
M美	「あー、知ってる、知ってる。赤い屋根のうちだよ」
M男	「オレも知ってる。白い壁のうちだよ」
保育士	「へえー、いつ来たの？」
A美	「あたしも行ったよ。先生いるとき。だって、洗濯物干してあったよ」
M美	「そうそう、お布団だって干してあったよ」
保育士	「えー、みんな来てたんだ」
M男	「うん、そうだよなあ！」
みんな	「うん！」

この口頭詩で紹介したような事が、実際に起きるわけではない。しかしながら、次々と子どもたちは想像豊かに言葉をつなげていっている。こうしたことは、ファンタジーの世界である。私たち大人や保育士は、こうした子どものファンタジーの世界を共有していくことが大事なのではないだろうか。

私は、子どもはみんな「不思議の国のアリスの住人」だと思っている。子どもたちは、アリスのように次々とファンタジーの世界をつなげていく力を本来持っているのである。そうした力を曳き出すようにしていくことが大事なことのだと考えている。そのことが、実は子どもの言語を豊かにするだけでなく、想像性豊かな子どもにしていくのである。また、そうした力を育てることが、幼・保・小の連携と言ってもいいのではないだろうか。

#### 5. 子どもだって怒っているんだ！

次の口頭詩は、見事に5歳児の発達を示しているように思っている。大人からしたら変な理屈を言っているのかもしれないが、自分なりの言い分を持ち、それに基づいて話を展開しているところが本当におもしろいと思うのである。

さてさて、幼い子どもであっても、怒る時は怒るのです。次の口頭詩を読んでみて下さい。

ちえみ 「あたし、よしえ先生に変身したいな」  
 保育士 「なんで？」  
 ちえみ 「だって、好きに怒れるから…」  
 保育士 「エッ…（絶句）」  
 ちえみ 「だってお母さんが、子どもは怒っちゃいけないって言うんだもん」  
 保育士 「ちーちゃんのお母さんは、怒らないの？」  
 ちえみ 「お母さんは、怒ってる！ 私も怒りたいけれど、言うと怒られるから、心の中で『バカヤロー』とか思っている。これ絶対に言わないでね」  
 保育士 「ふう〜ん、子どもは怒っちゃいけないんだ」  
 よし子 「そりゃあ、そうだよ」  
 保育士 「そうなんだ」  
 みき 「あたし、大人は怒って欲しくないけど、子どもは怒っていいと思う」  
 保育士 「どんな時、怒りたくなる？」  
 はるき 「先生が、ドッジボールをさせてくれない時」  
 みき 「あたし、ドッジボールの時、お腹にボールがあたって痛かったのに、よしえ先生が『大丈夫』って言ったのが、すごくむかついちゃった」  
 保育士 「そうだったんだ。ごめんね」  
 ちえみ 「眠くないのに、お昼寝の時、『静かに!!』って言われると、自分が寝ればいいじゃんって思う」  
 保育士 「ふう〜ん」  
 みき 「そうだよ。子どもの方が怒っているんだからね」

幼い子どもであっても、しっかりとした言い分がある。そのことを、私たち大人や保育士は忘れてはいけないのではないだろうか。「子どもの権利条約」の中に、子どもが自分の意見を表明する権利がうたわれている。その趣旨をしっかり踏まえ、幼い子どもの言葉に耳を傾けていく必要があるのだと考えている。

また、こうしたことが言えるような子どもと保育士の関係を創っていくことが、大事なことになるのではないだろうか。

## 6. 「うち談義」にノリノリの子どもたち

子どもたちは、「うち」「おしっこ」「おなら」の話が大好きである。そうしたことについて、次のていねいな記録を読んでみてもらいたい。「よくぞ、ここまで書いているな」と思ってしまう記録である。

### ネコのうち（4・5歳児）

ネコへの張り紙をしたことで、プランターなどにフンをしない日が続いていたが、あ

る日…。

らいむ 「わ～っ！ 大変！ 私がせっかく手紙を書いたのにうんちがしてある!!」

「先生、ハートの形のうんちだよ～」(本当にハートの形でした)

保育士 「本当にハートみたいだね。ハートをうんちで作れるなんてすごいなあ…」

保育士 「ネコのうんちと皆のうんちを比べると、どうだろうな？ 色とかにおいとかは？」

らいむ 「黄色いね」

ゆうか 「ベージュじゃない」

保育士 「みんなのは、何色なの？」

らいむ 「黒だよ」

なおき 「黒いよ。こんな色のうんちの人はいないよね～」

まさき 「まさきのは、黒茶色でもっと太いよ」

保育士 「このネコうんちは、いいうんちかなあ？」

なおき 「バナナうんちだから、いいうんちだよ。ゲリしてたら、ゲリうんちでしょ」

保育士 「においは、どうだろうね？」

はるき 「くっさ～い！」(本当に間近まで鼻を近づけて)

保育士 「ネコは何食べたんだろうね？」

らいむ 「ハート形のオムライスじゃない」

ゆうか 「カレーじゃない」

ひろし 「こんなにくさいから、にんにくだよ！ にんにく食べた次の日は、くさいんだよ」

はるき 「どんぐりくさいよ」

保育士 「みんなのもくさいの？」

なおき 「くさい日と、くさくない日があるよ。」

らいむ 「そうだよ。うんちが毎日出ないと、固くなってくさいし、すぐく出るのも大変なんだよ。でも毎日出ると、やわらかいし、あんまりくさくないよ」

保育士 「らいむちゃん、便秘症だったからよく知ってるよね」

～ 皆、ずっとうんちのそばから離れないので ～

保育士 「このうんち、どうする？ 片付けていい？ 持って帰る？ 観察してこのままにしておく？ 集める？」

らいむ 「いいね～。集めようよ。バケツに入れて、混ぜてみようか」

ゆうか (2人で盛り上がるがバイ菌もたくさんなので処理し、またうんちされないように、はがれかけていた貼り紙を見えるよう貼り直した。)

よくぞ、ここまで言っているとうなってしまう。子どもは、こうした話が大好きである。だからこそ、そうした話を否定せずに、とりあえず聴いていくということが大事なることな

のである。もちろん、意識的に汚い話をして欲しいと言っているわけではない。こうした話を否定せずに、その会話を楽しむぐらいの余裕があった方がいいのではないかと考えているのである。こうした話が自由に出来るということは、子どもとの関係がとてもうまくいっていることだとも言えるのではないだろうか。

## 7. 人間としてのコアの部分を作る

### (1) 子どもたちにとっての「友だちとの別れ」

次の記録は、「友だちとの別れ」についてのものである。私は、胸が熱くなる思いでこの記録を読んだ。紹介してみたい。

#### 友だちとの別れを通して

ひびきのお別れ会を行う。グループごとにひびきが喜ぶことを考える。なぞなぞを出題するグループ、ネックレスを作るグループ、お笑いをしたいという子がいる。

当日、各グループが出し物をした後、

「ひとりずつ、ひびきちゃんと握手をして、お別れの言葉を言おうね」

と私が言うと

「元気でね」

と言う子がほとんどだった。

会もそろそろまとめて、終わりにしようとする、一人の男児、拓也（6歳）の様子が…。

「拓也君、どうしたの？」

と近づくと、泣いていた。

「そうだよ。悲しいよね」

と肩を抱き振り返ると、ひびきも泣き出した。

「いいよ。ひびきちゃん、泣きたいんだよね。泣いていいんだよ。今日は思いっきり泣こう」

と、私も涙声になり伝える。

そのとたん、うあ〜んと、まわりの子も泣き出した。男の子も泣いている。痛くてもくやしくても泣いているところを今まで一度も見せたことのないみのり（女子6歳）も、泣き顔をこちらに見せないように泣いている。“泣き”が止まらないので、

「みんな、ここ（胸）をなで降ろして、そろそろ涙を止めてごらん」

と言うと、

「さっき先生は、“思いっきり泣こう” って言った〜」

と、どこかから声がする。

そのあと、子どもは泣きじゃくりながら

「ひびきちゃん、忘れないから」

「元気でね」

「ひびきちゃん、また会おうね」

と言葉をかける。

ひびきちゃんの腕にすがって泣いていたこうき（5歳）は、

「つらい、つらい、お別れつらい」

「ひびきちゃん的笑顔が見たい」

「大人になっても忘れないから…」

と、泣きじゃくる。りさ（5歳）・ひろみち（6歳）も、

「大人になっても忘れないよ」

と声をかけ、泣く。

私は、儀礼的に「お別れを言おう」と言ったことが恥ずかしくなるくらい、「子どもからわき出てくる言葉は生きている」と感じた。切ないとか悲しいという感情を「つらい」と表現したこうきの純粋な気持ちに感動した場面だった。

子どもたちは、こうした喜怒哀楽の感情を表出すると共に、それを共有することで、豊かな感情が育っていくのである。また、そうした感情を共有してくれる大人や保育士の存在が、大きなポイントになるのではないだろうか。保育という仕事は、こうした子どもたちの感情のコアを創る大事な仕事をしているのだと言えるのである。ぜひとも、その重さと誇りを持って、保育という仕事を進めてもらいたいと、私は考えている。

## （2）人間としてのコアの部分を創る

私が6年生を担当した時のことである。クラスの子どものお母さんが自殺をしてしまった。様々な理由からノイローゼになり、死を選んだのである。玄関に入ると居間があり、そこで自殺をした。その第一発見者が、私のクラスの子どもになってしまったのである。6年生にとってはあまりにも重すぎる事実であった。葬式の時、私はかける言葉が見あたらなかった。どんな言葉をかけてもむなしいような気がしてしまったからである。結局、私は彼の肩をとって一緒に泣いてやることしかできなかった。そして、そんなさけない自分に腹が立って仕方がなかったし、そのことが、ずっと私の心の中にトゲのようにささっていたのである。

5年ほど前のことである。その子が中心となり、当時のクラスの仲間を20人近くも集めて、私を含めた同窓会を開いてくれた。同窓会が終わりに近づいたころ、彼はそっと私のそばによってきて、

「先生と一緒に泣いてくれたこと、今でも覚えているよ。あの時、自分自身が本当につらくて、僕も一緒に死んでしまおうかと思ったけど、先生と一緒に泣いてくれて、死ぬのをやめたんだ。先生、一緒に泣いてくれてありがとう」

と声をかけてくれたのである。何も力になれず、ただ一緒に泣くことしかできなかった

なさない私にかけてくれた彼の言葉に、私は泣けて泣けて仕方がなかった。でも、一緒に泣いたことで、彼の苦しみが少しでも和らいだとするなら、それはそれで良かったのかもしれない。

そんな経験があるため、「命」や「別れ」についての子どもたちの詩や実践記録は、本当に私の胸をふるわせるし、私の心を揺り動かさざるをえない。この保育士は、子どもとの別れの中で一緒に泣いている。泣くことしかできない自分がいるのである。子どもが泣き、保育士が泣く。その時、そこに感情が共有される空間が生まれるのである。私は、それでいいのだと思う。一緒に泣くことで、子どもの哀しみが少しでも癒えたら、それで十分なのだと思う。そして、そうした経験が、実は人間としてのコアの部分創っていくのではないだろうか。

ここに出てくる「こうた」という男の子が、とてもステキだし、かわいいと思う。「つらい、つらい、お別れつらい」という「こうた」の言葉は、短いけれど立派な口頭詩だと思うのである。

## Ⅱ ―― 親とつながるための・壁新聞・園だより・学級通信

### ◎ 壁新聞を使う

#### (1) 壁新聞に写真をふんだんに

次の記録は、3歳児クラスの壁新聞である。この壁新聞にはふんだんに写真を使っている。デジカメで子どもたちの様子を撮り、それを壁新聞の形で貼り付けていくというものである。今、保育士は本当に忙しい状況になっている。しかし、デジカメで写真を撮り、それに簡単なコメントを入れていくという形なら、あまり労力を使わずに発行することができる。しかも、そうした出来事があった日には発行されるのである。まさにタイムリーな新聞発行である。



かがやけ“くま”なひと



このクラスの保育士は、「その子の持っているステキな所（気配り、優しさ etc…）」「その子の努力した姿（あきらめずに頑張る続ける力）」にスポットを当てたかったと言っている。意図的にどのような写真を撮るかがとても大事な視点である。

親たちは、掲示された写真を携帯電話で写メを撮り、祖父や祖母に転送していたそうである。そのため、保育参観などにも、祖父や祖母の姿が見られるようになったそうである。子どもの姿を出来るだけ伝えていくことが、親への情報提供になるし、親を園に目を向けさせていく力になるのである。

## （2）子どものおもしろさを伝える壁新聞

子どもというものは、元来おもしろいものである。おもしろさを伝えていくことで、親は子どもの新しい面を発見していく。ある保育士は、「ヘン顔コンテスト」という壁新聞を発行した。

この壁新聞は、大変好評だった。子どもたちに自分でいろいろな顔をつくらせ、それを壁新聞に貼っていくと同時に、右の写真のように、子どもたち一人ひとりの顔の下に保育士のコメントを入れていく。子どもの「ヘン顔」と「保育士のコメント」がセットになっていくことで、「我が子をこんな風に見てくれているんだ」とか「こんな温かい目で見ているんだ」というメッセージとして伝わっていったのである。親にとって、我が子の様子だけでなく、我が子がどのように保育士から見られているかは、とても気になるものである。そうした不安に応える壁新聞だといえるのではないだろうか。



## （3）吹き出しを親に書いてもらう

右のような写真を数枚教室前に掲示しておくと同時に、「吹き出しを切り取ったもの」を箱の中に入れておき、自由に親に書いてもらい、それをノリで貼っていってもらう形にした。

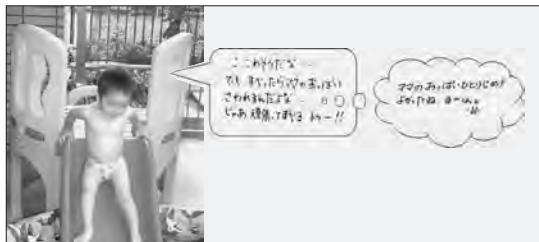
親は、一枚の写真にどんどん吹き出しを貼



り付けていった。1～2日経ったところに、それを集めて学級だよりを発行したのである。つまり、親の力を借りて、学級通信ができあがっていくのである。保育士にとって、どのような吹き出しを書いてくれるかがとても楽しみであると同時に、親の我が子への見方がわかっていったのである。保育士の省エネになるだけでなく、親を理解する大きな力にもなっていた。

#### （４）双方向の学級通信を

保育園で撮った写真と吹き出しを渡し、「翌日に写真と吹き出しを返却してもらおう」という約束で吹き出しを親に書いてもらう形にした。すると、ほとんどの親が翌日、吹き出しを書いてくれた。そして、そこに保育士のコメントも入れていくという形をとって、学級通信にしたのである。



こうしたものを集めて作ったものが、右のような学級通信である。（通信名は伏せている）

このように、親にも参加してもらうことが学級通信を豊かにしていくのである。学級通信を担当からの一方的なお知らせやお便りにしていくのではなく、親にも参加してもらう。そうした双方向の通信を発行していくことが大事なポイントである。

親は誰しも参加したがっている。また、「自分の子ども」・「自分のコメント」・「保育士のコメント」の3つがセットになっているのである。

こうした工夫をすることによって、親は保育園に非常に協力的になってくれたそうである。情報を提供すること、親を参加させることが、親・子ども・家庭をつないでいく大きな力になるのである。



#### （５）行事の様子を写真を使ってタイムリーに発行する

保育園にはたくさんの行事がある。その時に、デジカメで撮った写真を使って、すぐにその日のうちに発行していく。すると、親たちはそれを見て「保育園では、今日はこんなことがあったんだ」と理解し、帰りながら子どもと話をするようになっていった。帰りの時間は、わりと自由に使えることが多い。つまり、忙しい親にこそ、「親子の心温まる時間」を提供していくことが大事だと言えるのである。そうした親子の少しずつの会話が、子どもの情緒や安心感を育てていくのである。もちろん、家に帰っても、お父さんをまじえた話に発展していくことが多くなったそうである。

この実践の利点は、次の3点である。

- ・写真、コメントによりわかりやすい
- ・時間をかけずに作ることが出来る
- ・タイムリーに知らせることができる

それに対して、難点は次のことである。

- ・送迎者以外は見ることが出来ず、家族で情報の共有が難しい

この難点をいかにして克服していくかが、次のポイントになるだろう。



### Ⅲ ―― ほらあな空間による「密接な関係作り」と「関係性の変化」

#### 1. ほらあな空間と密接な関係作り

現在、ある保育園の園内研修に関わらせてもらっている。それは、「ほらあな空間」による密接な関係作りと子どもの関係性の変化である。下の写真は、2歳児クラスのものである。

右下の写真の1枚目は、最初に作った大きな家である。その後、しばらくして一番下の右のような小さな家を作ってみた。最初、子どもたちは大きな家に興味を持ち、みんながいっぺんに入ろうとした。しかし、この大きさではせいぜい4~5人ぐらいが限度である。そのため、小さい家を作ることにした。

私は、今の子どもたちの一番大きな課題は、人間関係を創るのが下手であることだと考えている。たいていの保育士や幼稚園教諭が、クラスという集団をいっぺんに動かそうとする。そして、全体を巧みに動かせる保育士や幼稚園教諭が力があると言われるがちである。しかし、それは大人の側からの視点であると言わざるを得ない。

私は、まずは3~5人程度の親密な人間関係を構築させていくことが大事だと考えている。親密な人間関係を築かせ、他者認知から他者理解へと進めていく。そうした経験が、人間関係創りの基礎になっていくのである。

ただし、その親密な人間関係は、時として排他的な性質を持つことがある。それを防ぐために、「お買い物ごっこ」や「ゆう



れいごっこ」などの保育実践を取り入れ、意図的にその小集団をシャッフルさせていくようにする。そのことで、子どもたちは新しい小集団を形成していくようになっていく。この「ほらあな空間」は、子どもたちの親密な人間関係を創る大きな力となっている。そうした環境作り（場作り）をしていくことで、子どもたちの自然発生的な親密関係が生まれていく。その小集団による親密な人間関係を、少しずつ中集団→大集団と発展させていくことが、今の子どもたちの人間関係創りの力を育てていくのに必要なことなのである。

## 2. 「ほらあな空間」を作ることでの子どもの変化（2歳児の場作りで起きた出来事）

では、そうした空間を作ることによって、子どもたちはどのような変化・成長をするのであろうか。そうした例を紹介したい。

一人で大きいお家に入り、寝そべっているゆりちゃん。よし君が入ろうとすると、	
ゆり	「やだ」と言って、中に入ってくることを拒む
よし	「ゆりちゃんがヤ〜ダって言うから、こっちに入ろうよ」
と、小さいお家を指さし、なお君を小さい家に誘っている。	
なお	「トントンの、なかに入っていていいですか、トントン」（中に入りたがっている）
ゆり	「……」
よし	「じしんで〜す」と、手に持っているブロックを口にあて大きいお家に向かって言う。
さとる	「じしんで〜す」と、マネして言い出す。
保育士	「地震だって、どうしよう」
<div style="display: flex; align-items: center;"> <span style="font-size: 2em; margin: 0 10px;">➡</span> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-left: 10px;">           集団への溶け込みをはかっている。            （他者認知から他者理解へ）         </div> </div>	
なお	「お家に入らなくちゃ」と、ゆりちゃんの入っている大きいお家に入っていく。
さとし君もよし君もゆさ君もそれに続いて入っていく。	
ゆり	「じしんで〜す」と、一緒に遊びだす。
その後、「じしん、おわりで〜す」と言って出て来たり、「また、じしんで〜す」と言ってお家に入った。ゆりちゃん、なお君、よし君、さとる君、さとし君、ゆさ君が一緒に出たり入ったりを何回も楽しんでいった。	

ここでの「地震だって、どうしよう？」という保育士の言葉は、「集団への溶け込み」をはかっている言葉である。この会話の中の、よし君の「じしんで〜す」の一言で変わる子どもの関係性に注目してもらいたい。「入れてあげようよ！」と保育士が言ったら生まれなかった出来事なのではないだろうか。

なんとか大きい家に入りたくて仕方がないよし君は、「じしんで〜す」と声をかける。それに続いて、さとる君も「じしんで〜す」と声をかける。なお君も「お家に入らなくちゃ」と、ゆりちゃんの入っている大きいお家に入っていく。そして、その他の子どもも入って

いく中で、ゆりちゃんも「じしんなら仕方がないや」という気持ちが生まれていく。もちろん、現実ではないことを知りながらである。このやり取りは、本当に絶妙と言って良いのではないだろうか。最終的には、ゆりちゃんも含めた数人の遊びへと展開していく。こうした智恵を育てていくことが、人間関係創りには必要である。

「ほらあな空間」によって、子どもたちの成長が促された場面である。

### 3. その他のクラスにおける「ほらあな空間」作り

他のクラスでは、どのような「ほらあな空間」が作られているのだろうか。紹介してみたい。

①小さい部屋を作ることで、子どもの小さい集団を作っている



②教室のコーナーを使つての空間作り



③教室を区切ることで、空間を創り出している



④楽しむ子どもたちの様子



## Ⅳ——全体を通してのまとめ

以上のことから、次のことが言えるのではないだろうか。

### 1. 口頭詩の研究から

- ①子どもたちは命令言語に囲まれている。そのため、「自己決定権」が奪われていると言  
って良い。命令言語から感情言語に移行することで、豊かな感情が育まれる。
- ②保育士の働きかけによって、豊かな会話が生まれる。
- ③保育士の言葉がけによって、豊かな人間観を育てていく工夫が必要である。
- ④子どものファンタジーの世界を共有することで、新しく見えてくる子どもの姿がある。
- ⑤幼い子どもであっても、言い分がある。それを大事にしていくことで、自己肯定感が  
育っていく。
- ⑥大人にとって汚い会話であっても、まずは受け止めてあげることが大切である。
- ⑦保育は、人間の感情のコアを創る大事な仕事であることに誇りを持ってほしい。
- ⑧小学校へつながる学力の基礎としての保育実践について意識していくことが大事であ  
る。
- ⑨人と人がつながる言葉を教えていく事が大切であること。
- ⑩幼・保・小の連携とは、幼少期に豊かな人間性を育てていくことである。

### 2. 親とつながるための・壁新聞・園だより・学級通信

- ①ボードを見ることをきっかけに、周囲の掲示物にも目が向くようになっていく。
- ②保護者が一番知りたいのは、わが子の園の様子であり、ミニ写真集等で園の様子を知  
らせてきたことで、親子で楽しんで見ている姿を見ることが出来た。そうした工夫が  
必要である。
- ③特に中国人の保護者には、写真集を掲示した事で、園の様子がわかり、安心感につな  
がっていった。これは将来、外国人が増えて行くことが予想されるからこそ、視覚で  
伝えていくという視点が大切なのではないだろうか。
- ④クラス便りでは、文字を極力少なく読みやすくし、保護者や担任のコメントを載せる  
という工夫をすることで、楽しみに見てくれるようになっていった。
- ⑤他の保護者の子育ての様子を知る場になったり、わが子だけでなく、他の子への関心  
も大きくなっていった。現代では、親自身も分断されている。親同士をつなげていく  
ことも、大事な仕事となっている。

### 3. ほらあな空間による「密接な関係創り」と「関係性の変化」

- ①「ほらあな空間」による子どもの小集団作りによって、濃密な人間関係が生まれてい  
く。その関係性を創っていくことが大事である。

- ②「ほらあな空間」の存在によって、小集団が生まれるが、固定化しないように工夫すること。
- ③密接な人間関係が、排他的になったり固定化しないようにするためには、「お店屋さんごっこ」などの集団が混在化する機会を意図的に創る必要がある。
- ④「じしんで〜す」のような、集団が溶け込んでいくような言葉がけが子どもから生まれるようにしていく。
- ⑤「小集団」→「中集団」→「大集団」という形で、集団の段階をあげていくことが、幼・保・小の連携の一形式である。

#### 4. 最後に

この「ほらあな空間」の取り組みをしている園の保育士が、

「今まで集団を創るということは、全員で何かをすることだと思っていた。でも、密接な小集団を創ることで子どもが変わっていき、同時に積極的になっていくことがわかった。」

と言ってくれた。

この先生のクラスでは、あまり上手に人と関われない子がいたが、小集団を創ることによって、その集団でなら入ることが出来るようになっていったそうである。また、クラス全体や学年全体で何かをしようとするとき、積極的に立候補したり、進んでやるようになったそうである。子どもは、「自分が認められている」という感覚を持つことによって、積極的になるし、失敗しても大丈夫と思えるのである。この子は、小集団の中で認められ、自分の存在価値や存在位置がわかっていったのである。だからこそ、そのことを基礎として、大きく成長することが出来たのである。そして、失敗しても「あの仲間がいるから大丈夫」と思っているに違いない。子どもたちの居場所を創っていくことが、子どもを大きく変えていくのである。

保育というのは、大きな可能性を秘めている。それは、たくさんの豊かな保育実践を展開していく余地がまだまだあるということである。今一度、自分の保育を見直し、子どもの成長を促す保育実践を創り出して欲しいと願っている。